

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって

— ガブリエーレ・ツイーテン『皇帝と元老院への使節』の紹介を中心に —

楚 山 智 大

本書は、ローマ帝国、とくに地中海東半部の都市、公共団体や属州会議、組合等によつて皇帝のもとにしばしば派遣された、使節(*legatio*, *presbeia*)を扱う。マインツ大学に提出された学位論文から「外国の使節(*legationes externae*)」に関する章の大部分を省き、原題のまま公刊したのが本書である。本書に在来の研究への批判的視点は少ないが、政治的・経済的・社会的な側面から、帝政初期(トラヤヌス帝期まで。その理由は後述)における帝国内の使節の全体像を示してくれるはじめての書である。

本書の構成は以下の通り。Ⅰ序論、Ⅱ属州の使節、Ⅲ使節の任務、Ⅳ実際の旅行、Ⅴ皇帝との出会い、Ⅵまとめ、Ⅶ付録。なおⅤの三節「ローマ・パルティア間の会見儀礼」については、帝国支配外域からの使節を扱う部分であり、他の部分との整合性に鑑みて、紹介者が割愛した。Ⅶ付録は一八三件にのぼるイタリヤ外の使節団を、その派遣先に

従つてアルファベット順に列挙し、それぞれの使節の派遣目的一覧と使節団員のプロソポグラフィを提供する。こうした網羅的一覧表は本書の価値をいっそう高めている。基本的には著者の章・節立てに従つて紹介していくが、各節の名称については紹介者が適宜内容に即して変えたものもある。

Ⅰ 序論

新史料の発見や在来史料に対する解釈の深まりは帝政期の皇帝支配と使節慣行との関係に関する研究上の視点を多様化させ、またそこに介在した私的な人的関係(*clientela*, *patrocinium*)の重要性を示すことになった。本書の目的は、こうした研究の進展を踏まえ、皇帝あるいは元老院のもとに送られた使節の実態を探ることである。取り扱う時代は

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって（楚山）

アウグストゥス帝代からトラヤヌス帝代まで、つまり地中海世界に一人支配が成立した時代から、ハドリアヌス帝が属州を巡回するようになって、属州の使節がローマへの使節活動を制限することになる直前の時代までである。その期間の皇帝たちにとって使節の受け入れは、皇帝自らが帝国支配の善し悪しを判断する重要な機会であったという点、一方属州にとってローマへの使節慣行は、ローマ支配の承認表明の手段であったという点、そして使節慣行が経済的意義の側面と皇帝礼拝の制度的な一つの歯車としての側面とを同時に持っていたという点、が本書における議論の主要な焦点になる。

著者は帝政期の使節慣行から主に皇帝家への使節団の集中と属州の要求に対する皇帝の手厚い配慮とを読みとる。そして属州使節の人的構成や、通商、経済、表敬、追悼など使節に関わる法律および行政における彼らの具体的な任務など、従来の研究が周辺のにしか扱ってこなかったテーマを中心的に取り上げて、ローマ帝国の支配構造の中に使節制度を位置づけようとする。

Ⅱ 属州民の使節

一節 使節団員の選考と資格

属州や都市の使節 *legatio provincialis, legatio civitatis* に選ばれる要件は個人的な血統や声望、学識、公の場で発揮されるであろう個人的能力への期待によって構成されていた。他の使節との競争で優位に立つため、共同体や属州の利害を貫徹するため、政治活動への個人的な欲求を満たすため、使節団員には柔軟で入念な交渉力が必要不可欠であった。託宣により選ばれる場合もあったが、その際でも使節経験者や都市の役職経験者が選ばれる場合が多かったという事実はこのことをよく示している。

使節団員の選抜に際し、通常、個人の品行方正さ、生まれながらの自由人であるか否か、ローマ市民権の有無 (*IK* 21. 1 Nr. 326) などが問題とされたようである。年齢制限の下限については、はっきりとしない（しかし、cf. *IK* 28. 1 Nr. 113）。他方上限については年齢ゆえの健康上の危険が考慮された (*Sherk, RDGE* 146-157 Nr. 26)。また都市官職と使節活動との兼務は忌避された (*Lex Imitiana* 160 Z. 15 ff)。

二節 地方の「君候」

「君候」*gnorimoi*とは一般に王族との関係を有する者、姻族とその子孫等）であった (*AE* 1976 Nr. 677)。彼らはその血統ゆえに、使節に選ばれ、また、ローマ側から、所属

共同体に対する好意を獲得することができた。ただ、史料中、「君侯」と呼ばれながら地方王族の血統を有しない者もいた。そうした者は帝国行政内の官職在任期間の長さを誇っていたようである (CIG 2771)。

三節 属州最高神官と祭典競技担当官

昔からその地に居住する「君侯」のような伝統的な権勢家ばかりでなく、属州最高神官 *archiereus* や祭典競技担当官 *agonothetes* のような、皇帝礼拝に関わる神官としての活動を通じ、ローマ帝室に対する忠誠心を表明している者も、使節団員に選ばれた。属州最高神官は属州会議の議長で、都市における祭典競技担当官と同様に皇帝礼拝と同時に催される属州の競技会の運営に責任を負っていた。そのため彼らの使節団は競技会をめぐる属州の利害を代表して皇帝を訪れることがあった。また彼らだけでなく競技者団 *synodos* や競技会で活躍するディオニュシオス芸人団 *hoi periton Dionyson technitai* が競技会参加や競技会開催許可、皇帝への表敬、そして特権認可の要望などのため、独自にローマへの使節活動に乗り出すこともあった。とりわけ競技者団が使節団員として選んだ競技者は、すぐに属州最高神官や祭典競技担当官に選ばれ、その後皇帝のもとへ派遣された (JGR IV 495)。

四節 ローマ新市民

地元の「君侯」と縁戚関係にあるわけでもなく、属州神官でもない使節団員にとっては、ローマ市民権が大きな意味を持った。彼らはローマ市での滞在中、皇帝との密接な関係を得ようと努め、その結果ローマ市民権を得たが、今度とは逆にその結びつきを利用して、自らの出身市における影響力を強めた。彼らの多くは皇帝の氏族名を拝領したが、例えばアレクサンドリアのユリウス氏 (CPI 153 et al.) やエビダウロスのクラウディウス氏 (IG IV Nr. 87 et al.) などは、そうした結びつきを利用して自らの影響力を強めた恰好の事例である。彼らは共同体のために何度も使節団員としての務めを果たし、共同体と皇帝との協調関係の維持に努めた。その結果彼らが帝国公務への道に進むこともありえた。

五節 ローマ人入植者

前述の、新たにローマ市民権を獲得した人々は元来、各都市で影響力を持った富裕な名望家である場合が多かったが、その他に、ローマ人入植者 *Romaioi katoikountes* も使節に加わっていた。後者は、各都市の完全市民ではなかったが、法的には市民と対等の地位にあった (SEG 34, 1984, 314f. Nr. 1198)。彼らは主に地方で活躍する商業従事者で、

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって（楚山）

地方経済の保護者でもあったので、地域の職能集団の利害のために地元使節団に参加してローマとの交渉・仲介役を期待されたということはありうる。

III 使節団の任務

この章では著者は使節団の関わる問題の種類が非常に多岐に亘っていたことを記す。

一節 商業と経済

まず商業問題や経済問題の解決について、比較的帝国全体において普遍的な事例にあたる小アジア・北アフリカからの使節と、比較的特殊な事例にあたる黒海沿岸からの使節とが例示される。

a) 小アジアおよび北アフリカからの使節

彼らがローマに提出した中心的問題の一つは属州の経済生活上の不都合に関わるものであった。例えば小アジアでは、ペルガモンのロマ女神皇帝祭など、に広範な地域の人々の関心事であった祭典や競技会の開催が知られる（Cass. Dio 51, 20, 6-7）。このような祭儀では同時に、市場が開かれ、そこには近隣地域や外国から商人や職人、また芸人や競技

者も集まった。史料上こうした祭儀の活発化や経済的發展を促すような免税の申請、市場・見せ物が開催される神殿・神域のアジール申請、ならびにそのような神殿の建設許可申請などを行う使節の存在が確認できる（Tac. ann. 3, 63）。

この他にも経済的な面から、法律の改廃を求めたり、市場開設申請をしたりする使節などがあった。例えばスミルナの使節は、利益率の高いブドウ栽培を抑制して穀物栽培を推進する栽培法の取り消しを求めた（Suet. Dom. 7）。一方、北アフリカからの使節は市場の開設に関わる係争や苦情をローマに数多く請願している（Suet. Tib. 31, 2）。新しい市場の開催は、その市場がローマの財政上の要求に背くことなく、また市場を開く権利を持っている隣接都市の利益の妨げになることもないという条件でのみ認可されたが、今や帝国の穀倉地帯となった北アフリカでは、カルタゴを初めとして諸都市・諸共同体の経済的繁栄が著しく、貿易も盛んになり、各都市は、自らの富を一層増大させる市場の開設を競って求めたのである。

b) 黒海沿岸からの使節団とビザンティオンの利害

他方純粹に経済的利益だけでなく、さらなる外交上の努力と関わる利権を得ようとするローマの服属国や都市もあった。例えば黒海沿岸のボスポラス王国はローマに使節を派

遣し、ケルソネソス半島の諸都市の自由や免税特権などを求め、外交上の仲介者としての役割を果たした(Cass. Dio 37, 20, 2)。またこの地域はパルティアをはじめとする外敵の脅威を抱えていたために、ローマの軍隊による安全保障や統制を必要とした。黒海沿岸の使節は、この地の統制を司る総督に、通行許可証 *diploma* のような通商上、外交上の特権を求めた。これによってローマへの通行が許され、この地域は経済の繁栄を得ることができたとし、また東西間の通商を積極的に担うことになった(Plin. *ep* 10, 63 ; 67)。他方、ビザンティオンの使節は隣接属州の総督との協調関係によってローマの介入から最も独立した地位を得ようとする努力をはっきりと見せた。例えば彼らは五三年、こうした協調の結果、同市によるローマ軍への膨大な経済的援助の功績を評価され、クラウディウス帝から、五年間の免税の特権を与えられた(Tac. *ann*. 12, 62-63)。ビザンティオンは、本質的に黒海の近隣諸国と頻繁に接触しなければならぬという外交上の状況に依拠して、それらの諸国と皇帝との関係を仲介する役割に努め、小アジア西岸の諸都市が特権をめぐり互いに競い合っていた最中にも、そうした争いに巻き込まれることはなかった。

二節 財政援助

属州の使節団は、属州で天災が起きた場合、故郷の復興を目的に、財政援助の許可を得ようと、しばしば皇帝や元老院のもとを訪れた。その要求の内容は大きく分けて二つあったと思われる。一つは自ら復興することが困難な都市から出された、被災処理助成金や復旧資金を求める嘆願であり(Aug. *res gestae* 35, 4)、もう一つは被災しても、共同体内や人的ネットワークによって復旧資金の調達が可能である都市(Tac. *ann*. 14, 27, 1)や、自力回復を果たすことができる都市から出された税負担の免除や軽減を求める要請である(Tac. *ann*. 12, 58, 2)。これらの許可を帝国から獲得するためには使節団員個人の外交手腕もさることながら、皇帝の親族や皇帝家と懇意である王たちの仲介なども不可欠であった(Suet. *Tib*. 52)。

三節 権利と行政

都市の権利上の問題、行政上の問題などの解決を求めて派遣される使節もあった。

a) 属州の皇帝礼拝に関わる問題

例えば避難権 *asylia* や、神殿管理都市 *neokoros* にまつわる問題が知られる。避難権はその濫用防止のため、皇帝か

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって（楚山）

らの認可によって付与された（Tac. ann. 4, 37-38）。その結果小アジアにある都市の多数は使節団による神域への特権認可の妥当性を証明する義務を負う（Tac. ann. 3, 60, 1）。その際に都市の使節は自市の聖域についての古伝承や過去の神話をローマで報告したり（Tac. ann. 3, 61）、自市の神域に特権が付与されるべきことを認証する勅書の複写をローマに提出したのである（JK 22, 1 (Stratonikeia) 196）。

この他にも、属州の使節は皇帝・帝室への名誉決議や神格化決議を通じて、皇帝から地元での皇帝礼拝の挙行許可を得ようとし（SEG 11, 1954, Nr. 923）、皇帝神殿の建設許可や、皇帝礼拝の競技会や祭典の開催など、特権の要求の幅を拡大していった（Tac. ann. 4, 55; IG IV, 1 Nr. 87）。

属州における皇帝礼拝儀式の実状をめぐっても権利上の論争が生じた。例えば神官団内の特権をめぐる意見衝突（Suet. Aug. 93）、神域が都市建設計画の妨げとなったときの問題（Plin. ep. 10, 49 u. 50）、神殿の帰属問題（Tac. ann. 4, 43）などである。このような問題は聖法 Lex Sacra にもとづいて皇帝に訴えがなされ、それに対して皇帝は裁決を下したのである。

b) 皇帝礼拝に関わる以外の権利上の問題

皇帝礼拝に関係しない権利上の問題もあった。例えば、

まず自由市 *civitas libera* の法的地位に関する問題である。この法的地位は、都市の裁判上の特権を意味するとともに、直接皇帝に上訴する資格をも含んでいた。この地位にあった都市はとくに皇帝への上訴のため使節を派遣した（JGR IV 1123）。第二は、二つの都市に対し、同時に、公共奉仕を果たさなければならぬような他市市民権保持 *isopoliteia* の問題である（JK 24, 1 (Smyrna) 72-74 Nr. 593）。他市民民権取得者は、出身市と居住市との二重の負担に悩み、居住市の負担から解放されようとする一方、彼らが居住する都市の市民は彼らの処遇についての裁決を求めて使節を派遣した。最後に前総督に対する不法取得返還請求訴訟を求める属州の使節がある。しかし属州の権利上の問題としてよく知られるこの種の使節が使節全体の中で占めた割合は低く、この件について東方からの使節の方が西方からのそれに比べて圧倒的に多かった。

四節 表敬使節と弔問使節

属州の使節の中でも、ここで扱う、皇帝の死去に伴う弔問使節や、新皇帝の即位式に都市や属州会議の名誉決議を携えた表敬使節、戦勝式で皇帝への賞詞を述べたり、金冠のような献上品を手渡す祝賀使節が史料上目立つ。おそらくこれらの使節は、帝国への忠誠心を表すことで皇帝との

面識を得、皇帝との関係を悪化させないようにするために不可欠なものであった。しかしそれらの使節団が頻繁に派遣されたのは、ローマへの忠義を示すためだけでなく、むしろそのような特別な機会に皇帝や元老院を免税・軍役奉仕の免除といった特権の認可に動かすためでもあった(Tac. *ann.* 4, 55)。属州や都市にとってみると、それはローマとの政治的な対話の重要な道具であった。また直接皇帝との謁見を許された使節団員にとっても、謁見自体が格別な名誉となった。

補説 イタリア使節

イタリアは元老院の管轄下にあつて、他の属州とは異なる、特異な政治組織に組み込まれていた。イタリア内の使節は、派遣費用を保護者である元老院議員に頼ることができたし、後者は前者の用務を仲介することによって信頼を獲得できた(Suet. *Aug.* 100, 24)。いくつかの例外はあるけれども、属州の使節と比べてイタリアのそれは、表敬使節・弔問使節、凱旋式での称賛演説使節や、皇帝による決裁を要する、市場開設の認可・建設計画の提出・災害時の財政援助の要求といった使節など、特定の目的を持つ使節に限定されていた。イタリアの使節は、ローマ市とつながりがあつたり、帝室の一員や保護者である元老院議員との

接触の機会が多かったので、属州の使節に比して有利な条件下にあり、しかも比較的少額の費用負担で派遣され得たのである。

IV 実際の旅行

使節の派遣前に、使節団員自らがその資金の融通と旅程の選択とに関するさまざまな手続きを担当し、旅費の負担をも負うことが原則であったが、ローマ市滞在が予定より延びた場合に、彼らは共同体の特別金庫からその延長費を受け取った(IK 11, 1 (Ephesos) 87 Nr. 16, Z. 16 f)。また、公共奉仕として使節派遣の資金の全額拠出を使節団員の中の資金負担者が決った場合でも使節団員各自が使節依頼者に対する無償贈与出資*proika*として等しく負担することとなった(IK 30 (Keramos) 26-28 Nr. 14, Z. 20)。実際の使節費用の額は判然としないが、かなりの金額にのぼったことは想像に難くない(ILS 6087 XCII)。また皇帝の恩恵によって、使節団員が旅費の負担を免除された例が知られている(Philostr. *z.s.* 1, 520) が、そのような恩典を受けた使節団員は故郷で、ひととき大きな声望を獲得しただろう。

使節旅行の開始についての祈願や託宣の類から明らかな

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって（楚山）

ように、使節の任務の実行は宗教的行為と結びついていた。例えば、海路での旅行を開始する前に船長は神々への供儀や祈願と共に旅行の吉凶を占った（*Philostr. v.s. 1, 521*）。また、ローマで成功した使節が、海路で帰還してゐる際、同胞によつて故郷の港で歓待される儀礼 *kataploous* が行われ、その日は都市の暦に祭日として登録された（*JGR IV 292 Z. 35 f.*）。

旅程の策定においては旅行時間の短縮と生命の安全が勘案され、海路が好まれる傾向にあり、時期に関しては、航行が比較的容易な春秋と夏期が通常であつた。一方、イタリア本土を経由してローマ市に至るまでの、陸路による使節の移動手段は馬や馬車であつた。たとえイタリア内での乗り物の使用禁止を促すクラウディウス帝の試みにも関わらず、彼らは通行許可証を取得し、公共輸送便 *cursus publicus* を利用しようとした（*Suet. Claud. 25, 2*）。他方皇帝がローマ市に不在である時に、使節は請願を届けに皇帝を追いかけ、属州にも赴かなければならなかつた（*JGR IV 1693*）。

V 皇帝との出会い

皇帝の仕事のかなりの部分は各地からやつてくる使節と

会見し、その要求を聞くことであつた。皇帝は、滞在時の規制の確認や謁見日の確定などの手続きを使節・ギリシア語返書担当官 *procurator ad legationes et responsa Graeca* や勅答担当官 *ab epistulis* によつた宮廷官吏に任せた。実際の謁見において、皇帝はラテン語やギリシア語を主に使用していた。出身地の独特な言葉の発声や巧みな弁論術などからなる外国風の表現方法を用いる使節団員に注目し、彼らに対して好印象を持つ皇帝もあつた（*Plin. paneg. 56, 6*）。

一節 使節団員の謁見慣行

謁見時に皇帝は、多くの局面で自らの最終的決定権を誇示しようとし、また自らが帝国住民全体の現実的な期待にこたえる姿を示そうとした。たしかに、皇帝は、使節の要求を裁決する権利を元老院にも委ねていたが、実際に元老院に提出された要求は比較的僅少であつた。しかし法律問題や財政問題をめぐって皇帝を頼つてきた使節にとって、皇帝との交渉前に影響力のある「ロビー」を得ることは重要であつた。一部の影響力の強い元老院議員や帝室の一員は、最終的な決定権を持つ皇帝と使節をつなぐ仲介者としての役割を担うことが多かったからである。彼らを通じ、使節団は面識のない皇帝と謁見する機会を得、自分たちの

要求を実現させることができた(Jos. a. J. 16, 2, 5; Suet. Tib. 8)。皇帝は、帝国住民の苦境に常に配慮し、彼らを援助する最高権力者であった。こうして地域的な偏差こそあれ、私的にも公的にも、皇帝は自らの支配権を強化した。

二節 使節団員の服装と振る舞い

使節団員が皇帝ないしは元老院での会見の機会を得ると、使節団員個人の振る舞いも使節の任務の成功を左右した。つまり団員の修辭的才能や身につける衣装までもがそれに影響したのである。原則として、使節団は外交上の正式な礼服である民族衣装を身につけたと考えられる(Plin. paneg. 56, 6)。また故郷の共同体内の個人的な地位を表す服装も重要であった。地方の皇帝礼拝神官職に就く者の衣装、ローマ市民権の保有者を連想させるトガや騎士身分を表す礼服 *trabea* などがそれである。皇帝礼拝と密接な関係にある神官服は、皇帝家に対する忠誠心を示す格好の道具立てであった(Diod. 36, 13, 1-3)。また皇帝と親交のあった王たちはトガを着用し、皇帝と謁見した(Suet. Aug. 60)。

ローマ市における使節の活動は、嘆願書の提出や挨拶、帝国への忠誠の宣誓などにとどまらなかった。当然ながら、成功した使節を顕彰する都市の碑文は都市に対する彼らの忠誠心を証言しているが、ローマにおける彼らの振る舞い

については伝えてくれない。むしろ文学史料上に現れる不法取得返還請求訴訟の記事がこの点で示唆に富む。不法取得返還請求訴訟の例によると、使節に参加する人物は法律の専門知識を必要とした(P. Oxy. 1242)。専門家がいなかった場合には、使節はパトロン関係や契約などによって元老院議員に法廷代理を依頼した(Plin. ep. 3, 4, 3, 9)。その際、彼らは元老院において、それを自分たちの法的権利であると主張し、また法廷代理を議員の果たすべき道義的義務であると訴えた。一方首都の住民の不評を被った使節の事例からも彼らの振る舞いを知ることができる。属州バエティカの使節団員は、個人的な恨みから総督を訴えようとし、自らの雄弁さによってその総督を起訴することができた(Plin. ep. 3, 9, 31 : 33)。また使節団員の中には、買収や詐欺まがいの陰謀によってローマでの個人的な影響力を強めようとし、首都住民の不信を買う者もいた(Plin. ep. 4, 9, 20)。そうした者たちは神官職に就いていたことも、皇帝との親密な関係を有したこともない者たちであったからである。

VI まとめ

本書は、帝政初期の使節慣行が皇帝の帝国統治および属州の代表者たちの責任と密接に結合していたことを明らかに

ローマ帝政前期、「使節制度」に関する近業をめぐって（楚山）

にした。すなわち属州民側は様々な政治的・行政的・経済的必要性から使節を派遣する一方で、皇帝側は属州において自らに体现される支配の權威を維持する目的で使節を受け入れたのである。使節接見は、まさに、属州民側からの皇帝（元老院）への強い期待と、皇帝側の、彼らの要求に対する真剣な対応とが、如実に浮かび上がる場面であった。本書は帝政初期における都市行政制度の中における使節の位置づけについて、主として文学・碑文史料に基づき、名望家が都市のために果たす任務をつぶさに明らかにしている²⁾が、残念ながら、法史料の側からは十分な検討に欠けている。おそらくこのことは、本書の扱う時代範囲が、法史料の時代的範囲（二世紀半ば以降）とずれていることによるものである。しかし二世紀以降も含め、元首政期を通じての、使節の都市行政制度における国制史的役割を説明するためには、その検討も不可欠であり、今後、我々後進の課題としなければならない。

注

- (1) 本書の原題は以下の通り。Gabriele Zithen, *Gesandte vor Kaiser und Senat. Studien zum römischen Gesundheitswesen zwischen 30v. Chr. und 177n. Chr. (Pharos. Studien zur griechisch-römischen Antike. 2), St. Katharinen: Scripta Mercaturae Verlag 1994, VII, 339 S.*
(2) 使節に関して本格的な検討を要する法史料としては、何より *Digesta*, L, 7 (*De Legationibus*) が挙げられねばならない。

（本学文学研究科史学専攻博士課程前期）